

公 民

『公共，倫理』

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前文

令和8年度（第6回）共通テストが実施された。

評価に当たっては，報告（本試験）15 ページに記載の8項目の観点により，総合的に検討を行った。

2 内容・範囲

第1問 『地理総合／歴史総合／公共』の「公共」第1問と同じ。

第2問 『地理総合／歴史総合／公共』の「公共」第4問と同じ。

第3問 「他者」について（源流思想・西洋近現代思想）

授業前後での生徒間の会話を基本設定とし，友人とのケンカという社会生活上の経験を基に先哲の思想を参照しながら，「他者」について多面的・多角的に考察させる大問である。この科目で求められる学習内容からおおむねバランスよく出題されたが，特に西洋現代思想に関する知識が成否を分けた設問がやや目立った。教科書等に記述はあるが受験者の知識習得が十分でない内容から出題されたために，難易度が高かったと思われる設問が複数あった。誤文の訂正を考えさせる形式の設問や，教科書等で学んできた知識を基に資料を読み取らせる設問など，問題に工夫がみられた。全体的な難易度はやや高く，西洋現代思想に至るまで教科書等の記述を丁寧に理解することを促す大問であった。

問1 他者への思いやりや慈愛などに関する思想についての設問。一部に思想史的な知識が求められたが，授業や教科書で扱う内容が定着していればおおむね正解できる標準的な難易度であった。

問2 普遍的なものをめぐる思想についての設問。ウィリアム・オッカムについては教科書等での扱いがやや少ないが，他の選択肢の正誤判定が比較的平易であるため，おおむね標準的な難易度であった。

問3 『科学革命の構造』を資料とし，パラダイムの転換に関するクーンの考え方を問う設問。クーンの思想については多くの教科書等に記述があり，受験者が学んできた知識の理解を基に資料の趣旨を読み取らせる工夫がみられる良問であった。

問4 西洋思想における人間観についての設問。取り上げる思想家はいずれも教科書等に記述があるが，イは第一文の正誤にやや迷い，ウのコントが述べた各段階の説明やエの「故郷喪失」については知識として習得していない受験者が多いと思われる。消去法が使いにくい問題形式でもあるため，難易度が高い設問であった。

問5 ポリスと市民に関するアリストテレスの思想についての設問。誤りの文を提示して正文に訂正するための内容を考えさせるという形式に工夫がみられる。設問の「ただし」以降はやや分かりにくく，選択肢を含めて丁寧に設問の趣旨を読み取る必要がある。必要な知識自体は教科書等で学習する基本的な内容であり，難易度としてはおおむね標準的であった。

問6 仏教の経典を資料として、肉食をめぐる考え方を読み取る設問。資料の趣旨の読み取りに加え、既得知識と組み合わせて正答を導かせる工夫がみられる。平易に書かれた会話文がヒントになり、趣旨の読み取り自体は易しいが、聖徳太子が『三経義疏』で注釈をした経典名までは覚えていなかった受験者が多いと思われ、全体的にはやや難しい設問であった。

問7 ウィトゲンシュタインの言語哲学について、初期から後期への思想的変遷を扱う設問。いずれも教科書等で記述のある内容ではあるが、特に後期の思想に関する理解が不確かな受験者が多かったと思われ、やや高い難易度となった。用語を直接用いずに適切な表現で内容理解を問う良問であった。

問8 他者との関係について述べた思想についての設問。ホッブズに関する記述の判定は平易だが、ヘーゲルの承認をめぐる思想やレヴィナスの思想については理解が不確かな受験者が多かったと思われ、また単純な消去法が用いにくい形式もあって、やや高い難易度であった。

問9 大問を通した会話文を基に、他者についての倫理的な考え方を問う設問。ページをまたぐ読み取りが必要であったが、会話文の流れ自体は明解であり、やや平易な設問であった。

第4問 議論・対話について（日本思想）

日本思想における議論・対話について、生徒同士の会話を通じて思索を深める場面設定の大問である。授業資料や原典資料を用いた設問では、既得知識の理解と資料の読み取りを組み合わせた形式も見られ、難易度は適切であった。教科書で取り上げられた用語や思想の理解を問う設問の難易度は標準的で、おおむね日常の学習の成果が発揮できる設問になっていた。また、文章量は適切で、出題範囲も古代から近現代までバランスが取れていた。

問1 憲法十七条（十七条憲法）で説かれた、議論のあり方の説明の正誤を判断する設問。和の精神を踏まえた上で、必ずしも自らは聖で他人が愚ではないとすることや、重大な事柄は一人で決めず集団で議論すべきとすることなどの趣旨を理解していることが求められた。

問2 徳一と論争になった、最澄の法華一乗思想の内容について問う設問。代表的な大乘経典である法華経で説かれた「一切衆生悉有仏性」の意味の理解が問われた。

問3 授業資料から、儒者の太宰春台に対する国学者の反論を答えさせる設問。著書『国意考』や、本居宣長が学んだという記述からアに「賀茂真淵」が、日本神話である『古事記』を踏まえればイに「神々の事跡」が入ると分かる。細かな知識が定着していない受験者にとってはやや難問であった。

問4 中江兆民の原典資料を読み、兆民の思想についての既得知識と資料の読み取りを組み合わせる設問。平易であるが良問である。

問5 生徒の会話、三木清の原典資料を読み、小林秀雄と三木清の思想の説明の正誤を問う設問。原典資料の読み取りは平易であったが、小林秀雄の批評観について知っている受験者は少ないため、「対象についての思索を通して自身と向き合う営み」であるとする所まで理解が及んだ受験者は少なかったと思われる。設問中の説明を補うなどの工夫で、受験者の思考力を問うことができることが望ましい。

第5問 先端医療研究と倫理的課題（心理学、現代の諸課題）

生徒たちが、先端医療研究と倫理についての出張講義を聞いた後に、講師を交えて、生命倫理、再生医療、インフォームド・コンセントなどについて議論し、医療技術の進歩の中で、その恩恵を享受しながら人間の尊厳を守る方策について、考察を深めていく構成となっている。生命の萌芽である受精卵や胚をどこまで医療に利用してよいか、出生前の胎児が既に人間の特質を示す研究事例も取り上げて考えさせたり、医療研究において、患者や研究参加者をどのように保護するか、また、研究の利益とリスクの分配をどうすべきか、さまざまな立場から考えさせたりする内

容になっており，医療技術の進歩にともなう倫理的課題について，多角的に問う大問となっている。

問1 胎児が人間の顔に注目するといえる実験結果は胎児のどのような反応によって得られるかを問う設問である。実験内容はやや複雑であるが，選択肢が工夫されており，論理的思考力を働かせれば解答できる。

問2 心理学に関する基礎的な知識があれば解答できる。エクマンや内発的動機づけなども含めて，心理学における重要な人物や用語を理解しておくことが求められている。

問3 医療倫理やパターンリズムのような用語の理解だけでなく，その思想的背景として，カントやミルの思想についての理解も問う良問である。

問4 インフォームド・コンセントの内容について，会話文を提示して具体的に考えさせている。ただ，選択肢の正誤について会話文の内容を踏まえてより考えさせるものであればなお良かった。

問5 幹細胞の医療応用について，それぞれの立場に基づく意見として正しいものを選択する形式で，多角的に考えさせている。

第6問 「SDGsに関する倫理的な課題」について（現代の諸課題と倫理）

SDGsに関する倫理的な課題について，友人同士の会話を基に思索を深めていく大問である。教科書で取り上げられる基本的な知識の確認だけでなく，現代社会の福祉の改善点について具体的な場面を用いることで受験者の思索を深めさせる構成になっていた。文章量は適切であり，やや難しい設問もあったが全体として標準的な難易度であった。また，問題構成については科目固有の知識等をさらに重点的に扱えるよう検討を期待したい。

問1 SDGsの基本原則について会話文穴埋め形式の標準的な難易度の設問である。

問2 センのケイパビリティについての理解を問う設問である。ケイパビリティの語句の意味だけでなく，それを保障するための環境整備のあり方を理解していることが求められた。

問3 教育分野におけるSDGsの目標と日本の教育課題について適当なものを全て選ぶ設問である。各選択肢のキーワードに関する知識を問う構成に対し，選択肢の文章量が過多であったため，用語の正誤判断ではなく読解の負荷により，難易度が高くなったと考えられる。

問4 ジェンダー平等の社会的実現を目指した改善案についての設問である。各選択肢の内容は難しくなく，平易な設問であった。

問5 正義の倫理とケアの倫理についての資料と説明から，それらを日常的な場面に具体化させたものを判断する設問である。正義の倫理とケアの倫理の立場が分かりやすく平易であり，選択肢の文言を工夫することで，識別力のある設問となるよう改善が求められる。しかし，受験者に日常的な場面での立場を考えさせるのに適した良問であった。

3 分量・程度

試験問題の分量は，大問6，総設問数32の構成である。試験全体の分量や文字数については，「公共」と「倫理」それぞれの問題作成方針を考慮すると適切なものであったと考える。

「公共」の問題については，大問2問，設問8問で，制限時間内で解答できる妥当な分量であったと思われる。程度については，問題は，法と探究学習の分野から出題されており，かつこれらの中に倫理的分野の内容を組み込む工夫も見られる。全体的には，多くが基本的知識を問う問題であったが，難易度は妥当であったと考えられる。

「倫理」の問題については，設問数24の中で，資料や会話文を豊富に提示しながら受験者の知識や思考力を問う形で構成されていた。分量として適切な範囲であったといえるが，教科書等の記述

が少ない思想について詳細な知識を求めたり、会話文中の一人一人の発言を丹念にたどることを求めたりしており、解答に時間を要したと考えられる。受験者が、学んだ知識を基に、ページをまたいで戻らなくても解答できる工夫も必要かもしれない。程度については、幅広い分野が出題内容として取り上げられ、総合的な難易度についても適切である。受験者の知識や思考力を同時に問う良問も見られた。資料を提示することで考える材料を提供する工夫もあった。しかし、受験者の知識習得が及ばない設問もあったので、受験者が授業や教科書で身に付けた知識を基に、思考力を発揮できるように求めたい。全体としては、資料はよく精選されており、大問の構成も工夫され、適切な分量と程度の中で、受験者の知識・技能だけでなく、思考力・判断力・表現力等を測ろうとする、意欲的な試験問題となっていた。

4 表現・形式

各設問の文章表現・用語の扱いについては、おおむね適正であった。生徒同士や、生徒と先生、出張講義の講師等の会話をもとにした学習場面を基本設定とし、「公共」および「倫理」の学習内容を踏まえて、原典資料や実験などを手掛かりに各大問のテーマを探究する構成となっていた。そうした資料や図表の扱いはおおむね適切であった。また、大問の最後には、会話文や原典資料の内容を踏まえつつ、既得知識と資料の読み取りを組み合わせる良問や、誤文を訂正して正文とする工夫された出題もみられ、全体的に設問形式はおおむね適切であった。一方、配点については、教科書での取り扱いが大きいとは言えない心理学と現代の諸課題、「公共」とも重なる学習内容を中心に大問2問が出題されたのは、いささかバランスを欠いている。現代の諸課題を追究するテーマ選定は意欲的だが、高等学校等の学習現場で、教科書等の学習内容を適切に学んだ受験者に配慮した配点となることが望ましい。

5 まとめ（総括的な評価）

公民科は内容教科ともいわれている教科である。特に「公共」は、公民科における必修科目であることから、今回の問題をみても、基礎的・基本的な知識や概念の修得や、それらを活用することができる能力の重要性が感じられる出題であった。

「倫理」は、「他者」や「議論・対話」など現代社会においてますます重要となっているテーマ、また先端医療研究やSDGsに関する現代の諸課題を主題にして大問が構成されていた。全体的に授業や教科書で学ぶ内容の本質的な理解を問う出題がなされていたが、西洋の現代思想や日本の20世紀の思想などの分野について受験者の学習が手薄になりがちであるためか、当該分野に焦点化した設問は結果的にやや難易度の高いものとなった。また、正文の組合せを選択する設問では、文章が長いと正誤判定のポイントが分かりにくくなり難易度が上がるので注意されたい。誤文の訂正を考えさせる形式の設問や、教科書等で学んできた知識を基に資料を読み取らせる設問などの工夫がみられ、既得知識を基に思考力を問う多様な問題が今後も期待される。「公共」とも重なる学習内容や現代の諸課題からの出題がやや多く感じられ、バランスの観点から見直しを促したい。全体的な難易度は適切であり、倫理的な概念や考え方を具体的な日常生活の場面や現代の諸課題に照らして思索を深めさせようとする意識が感じられ、『公共、倫理』らしい問題であった。